

◎小学生の部

太田玉茗賞

わたしの宝物

手子林小学校 三年

五十嵐 千翔

わたしには、宝物がある。
大じいじからもらった大切なふでだ。
わたしが習字を始めた時にプレゼントして
くれた。
大じいじのふでは、まほうのふで。
わたしにとって、太さも、長さも全部ぴつ
たり。
どんなにむずかしい字だって、大じいじと
このふでさえあればすらすら書けるようにな
った。
昔、習字の先生だった大じいじは、
「よかんべ。よかんべ。」
といつもほめてくれた。

大じいじ、天国でも習字書いていますか。
わたしは今でもがんばっているよ。
学校でもじゆ業で習字が始まった。
だから、本当はもう少し教えてほしかった。
「たいいんしたら思うぞん分教えてやるか
んな。まってるな。」
ってやくそくしたのにね。
教えてもらってる時は
「何でやんなきやいけないの。」
なんて思っていたけど、
それは、とても大切な時間だった。
ふではもうボロボロになってしまったけど
わたしの、一生の宝物。

宮澤章二賞

弟のさん歩道

須影小学校 三年

藤井 萌恵

私の家の前をながれる か西用水ろぞいに
白い小さな花が一面にさいた 歩道ができた
きよ年 せいび工事をしていた
かんせいするのを 毎日楽しみに見ていた
さくらのつぼみがつきはじめたころ
弟はよちよち歩けるようになった
まるで 弟のさん歩道を作ってもらって
いるかのような気持ちで ワクワクした

キュッ、キュッ、キュッ、キュッ
私のお古の赤いサンダルは 弟のお気に入り
はじめのころは 一歩一歩がゆっくりで
転んではすぐないた
今では ニヤッとふり返って走り出す
キュッ、キュッ、キュッ、キュッ が

とても早くて力強い
転ばないように見はりながら
時どきヨーイドンをする

いつものベンチで休けい
小さな足をブランブランして 私を見る
麦茶を出すと ひな鳥のように
口をパクパクするのが かわいくて面白い

空高くさいたさくらや藤の花を

まぶしそうに見上げたり

モンシロチョウを一生けん命おいかけたり

さん業文かホールのよこで

大すきなトラツクにバイバイしたり

なかなか帰ろうとしない

一才の弟には ふしぎで楽しくてうれしい

とてもすてきなさん歩道だ

二才になったら 用水ろにういてながれる
さくらの花びらと ヨーイドンができるかな

優秀賞

家族の音

新郷第二小学校 六年

面村 風香

朝カーテンを開ける音
母が朝食を作っている音
時計替わりにつけたテレビ
家にはそれぞれ音がある。
私はその音で、毎朝自然と目が覚める。

母は幼いころ、祖母がふんでいたミシンの音と共に育ったそうだ。
羽生市はせんの町の町として昔からさかんで、近所のあちらこちらからミシンをふむ音が聞こえたそうだ。
私の祖母もその一人だ。
母は学校から帰った時、今日一日あった出来事を、ミシンの大きな音に負けないよう、大きな声で聞かせたそうだ。

時代が変わると音も変わる。私の家では夜になると、全自動洗たく機が静かに回っている音。
食器洗じよう機が水しぶきを上げて音。
兄が夢中になって遊んでいるゲームの音が聞こえてくる。
しかし家族の団らんと笑い声は、いつの時代になっても変わらない。
毎日あたりまえのように流れるが、素敵な音色に気づいた時、私の心はふと温かくなる。

ぼくのつうがくろ

川俣小学校 一年

根岸 柚伎

にゆうがくするまえに
おかあさんとおねえちゃんと
れんしゆうで
がつこうまであるいたとき
なかなかつかなくて
くたびれちやった

まいにち
がんばってあるいていると
みじかくかんじてきたよ

あさ7じに
いえをでるのは
ちよつとつらいけど
かえりみちは
とてもたのしいよ

ともだちが
「あの木に クワガタがいるよ」

と、おしえてくれて
クワガタをみつけたり

べつのひには
カブトムシもみつけたよ

ぼくのつうがくろ
ながいけど
おもしろいよ
だいすきになったよ

わたしとサケと利根川

羽生北小学校 四年

堀口 真祈子

羽生市の北を流れる

大きな川

利根川

わたしは毎年

サケのち魚を放流する

赤ちゃんの目がうつすら見える

ピンク色の小さなタマゴ

うすい皮をやぶり

かわいい赤ちゃん

「こんにちは」

おなかにタマゴのえいよう

たっぷりかかえ

ピクピク

ピクピクおよぐ

そして数か月

わが家の家族となった

小さな小さなサケを

利根川へ放流する

大きな大きな利根川を

すいすい

すいすいおよいでいった

元気でね

大きくなったら

帰ってきてね

またぜったい

この利根川で

会おうね

利根川は

わたしとサケの

きずなの川

佳作

ホタル

川俣小学校 二年

稲村 明奈

この前おばあちゃんがホタルをかってきた
わたしも弟もはじめて見る
まっくらにすると
工じげん場のように
ピカピカじゅんばんに
おしりをひからせる

「わーきれい」
「お母さんが小さい時
なつまつりが近くなると
ホタルがたくさんいて
足もとをてらしてくれたのよ」
と教えてくれた

ホタルはきれいな水と空気ですだつ
むかしは羽生にも

ホタルがいたなんて
きれいな水と空気だったんだ

わたしはまい日
きりふきで水をあげた
「少しでもながく生きてね」
そう思いながら

ホタルは十日間くらいしか
生きられないのに
まい日、まい日、きれいにひかる
「わたしはここにいますよ」
と教えてくれているように
わたしはホタルがそだつ
きれいな水がながれる川を
つくっていきたい

すずかけの木

新郷第二小学校 五年

堤 莉穂

学校のシンボル

「すずかけ」の木

何年も何十年も前から

校庭に立ち

ぼく達を見守ってくれている

ある年そのすずかけの木に

雷が落ちた

太かった幹はえぐられて

半分ほどの太さに

ふつうであればかれてしまうだろう

それでもすずかけはたおれなかった

大きな葉を青々としげらせ

力強く生きていた

「負けるものか」

そう言ってるように感じた

ぼくはつらい事があつたり

くじけそうな時に

よくすずかけの木を見上げる

そのうち不思議と勇気がわいてきて

気持ちひきしまる

風がサラッとほほをなでた

なんだかすずかけが

「がんばれ」

と応えんしてくれているみたいに思えた

強くてたくましい

ぼく達の「すずかけ」の木

そんなすずかけのような人間に

ぼくはなりたい

かくれんぼのへたなきじ

新郷第二小学校 三年

萩原 一帆

ぼくの住んでいる下新ごうには
きじがいる
さん歩をしている時
さいしよに見つけるのは妹犬ユキだ
だから ぼくたちはユキを
きじセンサーとよんでいる
きじセンサーは 後ろ足で立ちあがり
きじを目でおう
ぼくたちにみつかると
きじはすたこらさつさと走ってにげる
そこがかわいい
そして田んぼのうねの間に
ぺたんこになってかくれる
でも きじははでなので丸見えだ
おーい見えてるよ
と教えてあげても動かない
そのかわいい様子をしばらくながめて
ぼくたちはまた歩きだす
山でもないのにどうしてきじがいるのかな

きつと下新ごうがすきだからだ
みどりいっぱいの下新ごう
ここがぼくのふるさと

二つ目のふるさと

須影小学校 三年

長谷部 泰成

ザバーン
ぼくは今小豆島にいる
小豆島はもう一つのふるさとだ
小豆島は、「あーちゃん」の生まれた所だ
ぼくには、おばあちゃんが二人いる
「バーバ」はパパのママだ
「あーちゃん」はママのママだ
小豆島で有名なもの
オリーブ
二十四のひとみ
周りに海
しょうゆ
そうめん
小豆島の一日は
おきたらべんきょう
貝をとりに行き
海で泳いで
夕日を見に行つて
おまつり行つて

おんせん行つて
みんな夕ごはんを食べて
みんなでねる
羽生は好きだ
でも小豆島も好きだ
どうしよう
どうしよう
どうしよう
まよつてしまふ
そうだ、ふるさととは二つあっていいんだ

ぼくのじいちゃん

羽生北小学校 一年

渡邊 俊介

ぼくのじいちゃんは73さい
からだはやせつぽちちだけで
ぐらんどごるふのたいかいで
いつもいちばん
げんきいっぱい
スーパージいちゃん

じいちゃんは
ぼくがおなかのなかにいるとき
おおきなびょうきをしたんだって
しんじやうかもしれないくらい
おおきなびょうきをしたんだって
でもじいちゃんは
「うまれてくるまごといのちのこうかんだ。」
ってわらっていたんだって

ぼくはじいちゃんと
すもうをとるのがすき
たたかいごっこをするのがすき

こうさくをするのがすき

ぼくはじいちゃんが
だいすきだよ

ぼくのじいちゃんは73さい
ぼくが73さいになるまで
ながいきしてね

その他の良い作品

作品は羽生

市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
わたしのおばあちゃん	三田ヶ谷小学校 一年	秋山 真緒
冷や汁	岩瀬小学校 三年	石川 喜寛
ふるさと	新郷第一小学校 三年	柏瀬 有花
さかなとり	新郷第一小学校 一年	久保木 啓介
沙輝ざくら	井泉小学校 四年	須藤 沙輝
ぼくの好きな場所	三田ヶ谷小学校 三年	須永 紫陽

◎中学生の部

太田玉茗賞

柿の木

東中学校 一年

志賀 聖

何本かある木の中で
その柿の木は特に目立つ木だった
秋には沢山の実をつけ
沢山の鳥たちを呼ぶ
冬になり葉が落ちて淋しくなっても
鳥たちが集まる まるで冬の実のように
その柿の木が 時機をまっていたかのように
役目を終えた
それは去年の夏の始め頃だった
他の柿の木に見える緑の葉が
その木だけには 無かった
枝が淋しそうに手を広げ

そこだけ 冬のようにだった
よく見ると 太い幹に亀裂が入っていた
しかも まばらに 深く
雷でも落ちたのだろうか
けれど 焦げた後は見当たらない
どうしたのだろうか

ひいじいちゃんが生きていた頃
時々 話していたらしい
敷地の入口にあったその柿の木の根元に
防空壕があったことを
空襲警報が鳴ると
まだ小さかったじいちゃんを背負い
家族とともに逃げこんだということ

その柿の木は僕の知らない昔からの出来事を
ずっと見てきている
何十年もの間 この家を見守り
大きな母のような役割をしてきたんだ
その柿の木は 寿命という事だった
神主さんにおはらいをしてもらい
今まで見守ってきてくれた事に感謝した
長い間 お疲れさま
そして 今ままで ありがとう

宮澤章二賞

私と景色と夏の空

西中学校 一年

池澤 萌々香

じりじりと照りつける真夏の太陽
今日も一日とても暑い
汗をかきながら
自転車のペダルを勢いよくこぐ
部活の帰り道

きっと今日はキレイに見える
私のお気にいりの場所

あと少し もう少し
「わあ・・・」
やっぱり今日はキレイだ

何でもない景色かもしれないけれど
誰も目にとめないかもしれないけれど

夏の空の下

太陽に照らされて光る
一面の緑色の田んぼの海

きれいに晴れた夏の空
太陽の光をあび
風をうけて稲がゆれると
光がそれを追いかけると

いつのまにか暑さもベトベトの汗もふきとんで
私の心も夏の空のように晴れていく
今日もこの場所から
うれしさと元気をもらえた

きっと明日も暑くなる
元気になる夏の空

優秀賞

ふるさとの風に乗って

東中学校 三年

伊藤 さとり

羽生の夏、焼けつくような太陽の下、
思い出の公園にいる。

年少の頃、

暖かい日射しの中を、ころころと笑い転がる
私が出た。

私が出た。

中学生の私、

日陰の静かな場所で、毎週、絵を描き続けた。

「緑の絵」――。

太陽の光が反射して、まぶしいほどに輝いて

いたほていあおい。

背景に紫色の花が咲き乱れていた。

魅力的な夏の情景。

公園は、ふるさとの緑の香りと響きがある。

春に私は高校生。

未来の一步を踏みだす前に、

果てしなく広がる大空に、

私の夢を描いていく、

青く深い真夏の空、

限りなく続く――。

視界を遮るものはない、

天地に描いた未来には、

希望の光が満ちている。

夢を実現させるため、

今は飛び立つ準備中。

理想の自分になれるよう

しっかり学んでいこうと思う。

その時、

私は自分らしく、

健康という光をばねにして、

力強く飛び立ちたい。

空には風が希望の色で吹いている。

ふるさとの歌、

心よく響かせながら――。

私のふるさと「羽生」

西中学校 一年

加藤 真優

「心」は見えないけれど「心づかい」は見える

「思い」は見えないけど「思いやり」は見える

宮澤章二さんのふるさと羽生

章二さんは人々に元気を与えた

すばらしい人

それに羽生は

心優しい周囲の人々

自然豊かな所だ

町中にひびきわたる

“明るいあいさつ”の声

町中の人々が大切にしている

“ひまわりみたいな笑顔”

羽生の人々は

つらい時悲しい時は半分

嬉しい時楽しい時は二倍

に出来る明るく優しい人

章二さんが書いた詩

今ではたくさんの人々に勇気元気を与えた

3・11たくさんの命が自然によって消された

そこで

心は見えないけれど心づかいは見える

思いは見えないけれど思いやりは見える

この詩が世界へと広がった

たった一言で勇気づけられる人は

たくさんいる

そんなすばらしい人を生んだ

羽生

これからも自然が豊かになり

宮澤章二さんの詩が世界へと広がり

この地球がよりよくなるための第一歩を

踏み出していく羽生を

私はすばらしいふるさとだと

思っている

野菜畑

西中学校 三年

森田 真央

夏休み

暑い暑いこんな日には
やっぱりきゅうりを丸かじりするのが一番！

うちの庭に広がる自慢の野菜畑

きゅうりだけじゃないよ

トマト、ピーマン、なす

とうもろこしにスイカ：

太陽の光をたっぷり浴びて

すくすく成長する

水をやるとしずくがキラキラ光って

まるでカラフルなビー玉のよう

とれすぎてあまったときは

近所のうちにおすそわけ

うちの野菜のおいしさを

みんなにもわけてあげるんだ

うちの野菜でみんなが笑顔になれたら

すごく嬉しい

今年からは

黄色いトマトが仲間入り

そう、これこそが

私が夏を感じる瞬間

これこそが

私のふるさと

佳作

大切な場所

西中学校 二年

及川 夕翔

青い空に浮かぶ一本の飛行機雲
一面に広がる緑の葉
キラキラと輝く利根の川
静かにゆっくり流れてる

頑張ることに疲れたとき
行き詰まったとき
ぼくは決まってここへ来る

両手いっぱい広げて
大きく深呼吸する
大きく優しく流れる利根川が
弱気になったぼくの背中を
そっと押してくれる

「よし！もう一度頑張ろう」
前へ進む勇気をくれる

利根川はぼくのこれからを
見守ってくれている
大切な場所

声

西中学校 二年

柿沼 昇吾

「ミーン、ミーン」
朝からセミの声で起こされ
今日も暑い一日が始まる

母から
「早く支度しなさいよ」
せかさねながら学校へ

仲間達と交わす
「おはよう」
とても気持ちがいい

授業での先生の声
「ここを覚えておくように」
頭の中にインプット

部活動での部員達
「声だしてがんばろう」
家に帰れば

「おかえり」
家族の声にホッとする

今日の出来事 家族に話し
ほめられたり、怒られたり・・・

お風呂に入って一息ついたら
「リーン、リーン」
涼しくさせる鈴虫の声

「おやすみ」
僕の一日過ぎてゆく
変わりないこんな一日でも
自然や家族、仲間の声が
聞こえる生活
大事にしたい

ふるさとの歌

西中学校 三年

柿沼 美咲

夕食を作る母から美味しそうな匂いと共に
鼻歌が聞こえてきた

「何の歌？」

母に聞くと

「羽生の歌。〈羽生わがまち〉だよ。お母
さんね、この歌好きなんだ」

と母は言った

（羽生市にも歌があるんだー）

初めて聴いたこの歌はへなんだかとっても
親しめる。歌に思えた。

テレビやラジオで流れる歌よりもつとも
つと素敵なふるさとの歌

私の自慢の羽生市の歌

私がお母さんになったときに子供に歌って
あげよう

子守歌にしようかな

そしてもっと大きくなったら羽生の景色を
観て、感じて一緒に歌おう

未来へと続く
〈羽生わがまち〉を…

色を変えながら

西中学校 二年

田島 美紗希

また灼熱の太陽の下 私はコートで
声をだし
肌の色を真っ黒にしながら

ひたすらボールを打つ・・・。

「いち、にー、さーん。」

灼熱の太陽の下

汗を流しながらコートに立っている。

ジリジリと肌が痛い

暑さが加わり いつもより厳しい練習

「休んでしまいたい。」 何度も思った

それでも ひたすらボールを打つ

大会のため チームのため 先生のために

新人戦

勝って 勝って 勝ち進んで

次のステージに 羽生のゼッケンをつけて

そのためには 練習しかない

「この夏が勝負」 先生の言葉

暑くて つらくて 苦しくて

でも 汗をぬぐい 仲間と乗りこえる

そして、また 進み出す 目標へと

ふるさとの味

西中学校 二年

田中 亜美

春がやって来ると いつも
つくし取りに出かけた
空き地や 用水路のへり
小さい私は 腰をかがめて
よく目を凝らして
つくしを探す

出てきたばかりの 赤ちゃんつくし
背高のつぼの 兄さんつくし
でも 私のお目当ては
中くらいの まだ若いつくし
見つけた時の よろこびは
とっても大きい

取れたてほやほやの つくしたちを
祖母の家へ持って行くと
美味しそうな姿になって 帰って来る
それは 春の青々とした 若い味

素朴な味だけれど 私は好き
春が来ると思い出す 幼い頃の記憶
つくしたちが顔を出して 蘇る
それは いつでも 私の中に
ふるさとの味 いつまでも

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
私の青春の一部	西中学校 二年	入江 紗也華
本当の故郷	南中学校 三年	河村 咲希
羽生の夏祭り	西中学校 二年	小林 えり佳
ふたばの葉っぱの想い	西中学校 二年	斎藤 彩夏
時が経っても変わらないふるさと	南中学校 三年	田中 亨我
おみこし	東中学校 一年	増田 花恋